

平成 21 年度 アドバイザー会議  
第 5 分科会 議事録要旨

1. 日 時：平成 21 年 10 月 30 日（金） 15：15～16：10
2. 場 所：弘済会館 会議室（葵-東）
3. 参加者：会田リーダー、田澤リーダー、和崎構成員、細内構成員、柵構成員
4. 議事内容

● 分科会テーマ

「地域テレワークの活用」

● 議事

1. 分科会のとりまとめの方向性について

（リーダー）

この後の全体会議での提言に向けイメージを共有し意見を集約していきたいと思  
います。

（リーダー）

- ・ 地域でテレワークを使って、地域活性化するにあたって何が課題でその課題をどの  
ように解決して行くべきかについて、現状－課題－解決策－提言という形で進め、  
全体会議での発表内容のとりまとめを行いたい。

2. 各位自己紹介並びにテレワークによる地域活性化への意見

（リーダー）

- ・ 地域をテレワークで活性化させる為にはどのようにすれば良いか、どういう事が課  
題になっているか等、ヒントとなる項目立てをいただき、とりまとめを最後に行い  
たい。

（構成員）

- ・ 地域情報化がもっときちんと地域の為に資するような形で展開できないといけな  
いと思い現在の事業を立ち上げた。
- ・ シリコンバレーのネットデイを視察し、学校を核として地域の事を考えて行く施策  
として日本型ネットデイに取り組み、2005年に「IT政策パッケージ」に組み  
込まれ全国展開を図ろうとしたが、教育の現場も地域の現場も考えが違っていた、  
アメリカのようにネットデイでインフラ整備率が12%から98%になるような事  
にはならなかった。  
何故かと考えると日本は敷居が高く何かをしようとする聞いてない、知らないと  
言う。
- ・ もっと上手く地域イントラを活用する為の人材のネットワークとしての情報プラッ  
トフォームを作れないかという事で2006年から地域SNSを独自に開発してき  
た。
- ・ 日本には元々縦割りではない、横のつながりの地域ネットワークがあった、それが

皆の生活を支えて来た。この横のネットワークのノウハウとかWeb2.0とかを地域SNSの開発、運営に組み込むと結構上手くいく。皆が何を考えて地域SNSに入るかという信頼と募集性を基盤としたネットワーク作り、いわゆるソーシャルキャピタル作りを大きな柱としている。ソーシャルキャピタルができれば、その上では何でもできるはずで、リアルとバーチャルを上手くバランスをとりながら調和させ使いこんでいる。このSNSの利用者は3年間で5300人を超え自社で開発したオープンSNPというSNSのエンジンと運用ノウハウを活用している所が、全国で30ヶ所、2万人位いて、それぞれの地域でそれぞれの活用をしている。

(構成員)

- ・専門はコミュニティビジネスでコミュニティビジネスは顔が見える事がベースでアナログ的である。
- ・最近の悩みとして、ある県からアドバイザーを拝命し、地域のSNSを活用して業務を回して欲しいと言われたが、顔の見えない中でどのように業務を回して行けば良いのか、会った事のない人に呼びかけるのは難しい。
- ・1994年からコミュニティビジネスを提唱し、両国で地元の中小企業の方々とコミュニティビジネスを支援するための共同事務所を構え、主に生活弱者のための仕事・部署をサポートしてきた。その中の一分野にICTが入っていた。主婦向けにホームページ作りを仕事として出していた。自身のホームページも墨田区の主婦に製作をお願いした。墨田区の場合、ひとつのコミュニティの考え方が自転車に乗ってやって来る。つまり中学校区とか小学校区とか都心では小学校区あたりがひとつのコミュニティとしての機能を果たすのではないか。
- ・テレワークも地域コミュニティを意識して、テーマコミュニティだけでなく地域コミュニティの大きさを考慮する必要がある。人口密度の高い所は小学校区位、地方都市では中学校区位を意識したテレワークないしICTの活用を考えた方が良いのではないか。
- ・コミュニティビジネスという縦軸に対し、横軸にテレワークやICT、最近ではユビキタスタウン等が入っている。
- ・全国を周っていると情報リテラシーの格差が開いている感じがする。そこを人材育成なりユビキタス的に誰でもが活用できる社会、特に離島・過疎地といった、人の少ない所で、どう考えたら良いか真剣に考えていく必要がある。

(構成員)

- ・インターネット市民塾という仕組みを続けている。これは、市民が自ら塾を作って、テーマは色々あり、生活を楽しむもの・新たなチャレンジや次の自分作り等様々で、富山では年間100位の塾ができています。
- ・この3年間再チャレンジ関連事業に取り組んでいる。厳しい状況から抜け出そうとする人、踏み出す意欲の無い人をどのようにしてフォローするか、水面下で混沌とする閉塞感の中で、仕事が無いあるいは仕事はあるが入口ではねられるという事が

現実的にはたくさんある。それらは、今すぐなんとかしなくてはいけない、3か月以内になんとかしなくてはいけない、その先に今のままではダメであるという感覚の3層位の人がいる。

- ・皆、今すぐといわれても自身の準備ができていないので、期間をためて自分を高めていかないとならない。
- ・平成19年に調査をした時には、母数は少ないがテレワークを使って仕事に就きたいという人が凡そ60%~70%近くあったが、一方で企業の方は数%というレベルでまだ意識のギャップがある。そのギャップをどうしていくかという事で、去年・今年と企業側と働く側と両方同時平行的に学ぶ機会を作り、両方から出た意見を相互につなぎ、ギャップは少し近づくかと思うのだが、中々難しい。そう簡単に意識が変わるものではないが、富山では2つの企業が去年・今年と意識を変えていただいた。
- ・現在、企業も疲弊する中で、地域に新しい事業を創って行く事をしなくてはならない、例えば先程のコミュニティビジネスとか、仕事を創って行くという意味では色々な人が集まって何かを足しあって仕事になるような知恵とか工夫が不可欠であり、その中で方法論としてテレワークが出て来るのではないかと思う。

#### —国領先生入室—

(リーダー)

- ・国領先生、テレワークとの関係について一言、進言していただけないでしょうか。(国領先生)
- ・私の研究室と御手洗先生の研究室でも高知のテレワークプロジェクトに関わっておりますが、テレワークが単なる下請けにならないで、つまり質的に生活が充実するようなものにして行くという処がすごく大きなポイントと思います。そういったような処に対してメッセージが発していければ良いと思っております。

#### 3. 地域テレワークの活用に向けた課題と解決策

(リーダー)

- ・テレワークが進んでいない課題と問題点を絞って提案という形でとりまとめをする。テレワークには、色々なイメージがあり、皆さんの意見を聞いていて、捉え方がそれぞれあって良いと思う。ITに置き換えたかた、コミュニティの最先端とか、テレワークという新しい働き方というものが、これからどのように進み広がっていくのか。

(構成員)

- ・企業側でテレワークの導入が難しいのはなぜか、企業側からみるとリアルな場を提供し時空を共有しながら連携がとれる、リアルな連携が一番、仕事が上手くいく。全ての社員をテレワークというのではなく、テレワークがしたいとか、させて方が良いとか、そういう属性の人たちにテレワークの環境を活用し、良いモデルを出して推進して行くのであろう。

小規模な企業では、家族的な環境が形成されて融通し合う事で生産コストを下げて

いる。テレワークで通勤時間がなくなったから時間が削減される事よりも、通勤して皆で仕事をする方が能率が上がるという事が往々にしてある。

(リーダー)

- ・皆で一緒に仕事をする事が効率に繋がっていて、状況に応じて家で仕事ができる環境を作っていくという事でしょうか。

(構成員)

- ・テレワークをしている派遣の方と社員との信頼関係は、構築しようとしているが中々難しい。

リアルな場をどのように環境として提供するかというのがあって始めてできるのではないのでしょうか、これが100人では難しいが、10人、20人とかの小さな単位であれば可能ではないか。

(リーダー)

- ・オフィスレス社会がテレワークの最終的な姿なのではないかと言われているが

(構成員)

- ・それは業態によって異なると思う。
- ・先程、柵さんが人と人との関係を生かすとおっしゃっていましたが、人間は10の能力と20の能力を合わせて30の仕事をするというのではなく、関係性が良ければ100でも200でも仕事をする。

(リーダー)

- ・いわきでも同じで、関係と関係の中でどうやって刺激、効果を創り出して行くように努力できるか、集まるという事は、仕事へのモチベーションを作るために行うのだけれども、それよりもお互い助け合うという原点に立ち戻っていくようなものではないか。

(構成員)

- ・出会った人がつながるツールとしてICTの空間があり、コンタクトする事で信頼のきっかけができる。その信頼のきっかけの目を育むのがリアルな交流であり、集めて始まるのではなく個々にその信頼のパスが通って行き最終的に1つのグループになって行く。会社がやるのかもしれないし、地域活動であるかもしれない。
- ・テレワークというのは、単なる手段であってテレワークが役に立つから活用するテレワークをするために何かを起こすというのでは決してない。人がつながっていく流れの中で一緒に協働するとかという場面が出て来て、それがテレワークにあるという話は非常に良くわかる。

(リーダー)

- ・テレワークというと離れていても良いのではないかというイメージが強くなってしまいが地域でのコミュニティ、コミュニケーションとかを大事にしながらいっていくべきであるという方向性を地域ならではのテレワークそれはつながりとか人と人とのコミュニケーションというのが重要になる。今回の分科会メンバーもそのような意味で集まったのではないか。

- ・総務省的に言うとネット基盤が当然、地域に張り巡らされるのですが、それを活用する段階というのは、結局、人とか地域の単位というのが重要になってくるといふ、そういう方向性が、ここに生まれるといいのではないかと思う。

(構成員)

- ・四季のサテライトオフィスでも色々議論してきたが、言葉をテレワークではなくても今は、地域でのICT活用でありユビキタスタウン、ユビキタスコミュニティをどう作るか先読みをしたビジョンをぶつけても良いのではないか。テレワークというと20年前の概念。

(リーダー)

- ・企業の分散オフィスのようなイメージがある。

(リーダー)

- ・地域でも例えば、高知とか北海道とか広い地域、山間部とかの方が仕事ができるように、中心部にいる人達のコミュニティの中で、一緒にテレワークで仕事ができるようにするというのと、東京から仕事をとって来て地域にいながら仕事ができる。つまり、人はそこにいる事ができるので子供もそこで生まれて、消費も発生し、地域の活性化につながる。

(構成員)

- ・そこが少し違うと思う。東京から仕事を持ってくるのではなくて、地域で仕事を生み出すような事に今後は変わって行かないといけない。東京から、大きな会社から仕事を貰ってテレワークをやるという発想を変えて行くのがこれからの時代ではないか。

(リーダー)

- ・そうなのですが、実態は、もともと東京からの仕事、地域で生み出す仕事を5対5にしたかった。それを損益分岐点としたが、いまだに東京8、地域2これが逆転できない。

(構成員)

- ・つながり、絆が希薄になったからなのです。つまり仕事があっても仕事を出す処が地域に見えないから東京に持っていくというか吸い上げられてしまう。地域の人たちが見えて繋がってれば、つまり、情報の地産地消ができれば地域の中で仕事が回るはずである。

(リーダー)

- ・オンラインショッピングサイトあるいは道の駅では、そういうモデルも出てきている。東北の商店だけで成立する。つまり黒字化できているという話もある。
- ・テレワークの前提が変わらなくてはいけない。

(構成員)

- ・一極集中で東京発信、東京から仕事という考え方から政権も変わって、多極分散型で独自に自情報を発信できて、それが付加価値を生んで仕事を生み出すような仕掛けに変えていくのにテレワークを使うことを考えるべきで、その時に地域コミュニ

ティの大きさであるとかネットワークの在り方であるとかを従来の上から目線の発想を変えないといけないと思う。

例えば80過ぎの方でこの町のことをよく知っている人のアーカイブを作って、それに対しお金を出して行くとかすると、地域で仕事が生まれると思う。東京発という発想を止めないとならない。

(構成員)

- ・発想を止めるというのは誰がどういうレベルで止めれば良いのでしょうか。

(構成員)

- ・国もそうですし、住民もそうです。補助金が出て基盤整備にお金が使えらるからケーブルテレビを入れてしまおうという、持ちつ持たれつの戦後60年行ってきた、お金の流れ予算取りを変えないとならない。事業企画書作りのワークショップを行っている、事業企画書というのは仕事を地域でどのように起こしていくかという事で5人位で議論してもらい、その中でステップを踏んで地域の課題からそれをどうやって解決するかという事を5人の意見を出し合って、地域の問題解決から情報とかICTとかテレワークの分野で議論をしていくと自ずと地域が見えてくる。そういう事に対して予算を確保したり、国が一律にばら撒くのではなくて、それぞれ手を上げるとか仕事を出していくとかすれば良いと思う。

(リーダー)

- ・先程の話で勘違いがあったのではないかと思うので一点だけ、私がテレワークでイメージしているのは、東京から仕事をというのではなくて、今まで企業誘致とかやって来ましたが、これからは人材誘致だと思っております。人の知恵を地域に返して、外に出て行った人が戻ってくるような地域にしないといけないと言った時にテレワークというのは東京の企業が人材を離さないために、地域に戻っても雇用したままで、地域でテレワークができるというテレワークもある、給料は向こうからいただき、知とコミュニティはここで作れる。

(構成員)

- ・私はその場合、テレワークと呼ばなくてもいいんじゃないかと思う。

(リーダー)

- ・費用からみると在宅勤務なのでテレワークに入る。

(構成員)

- ・どの目線でやったら良いのか悩む、個人の目線で見ると人を生かす、一人一人の関係づけをしていく中で地域に仕事が生まれうまく回るのか、仕事を探している人はそれぞれ違うので全部をまとめて考えることは難しい。また、組織とか企業、地域レベルの目線で見るとセイフティネットがないといけない。入口で撥ねられている人が沢山いる。輪の中に参加できないといけない。

(リーダー)

- ・今までは、景気対策としてIT化を見てきたが、社会保障的な部分を重視しながら、もう一度、施策展開を検討してもらおうとか、そういう事になりますね。

(構成員)

- ・就職という話であれば、グラムベッターの弱い紐帯の強さという論文があつて、肉親の紹介よりもちょっとした友達、弱いつながりの人達に紹介された就職先に長くいる、満足しているというデータが出ている。今、日本では強い紐帯は見えるが、弱い紐帯が見えなかった。それは、つながりの希薄さにある。近所とかコミュニティとかの人のつながりが必要と言われながらもどのようにして弱い紐帯を活性化したら良いのか、実際に政策に組み込まれていなくて、お金だけ来るので、「円で縁を切っている」のです。

(構成員)

- ・ゆるやかなネットワークをたくさん持っている方が、環境変化に対応しやすい。

#### 4. 提言に向けたまとめ

(構成員)

- ・これからは、一人一人が多足のわらじをはいていかざるをえない、企業が大きな企業でなくなりフラット型でバッチで仕事を請け負うという仕事形態の多足型になってくる。そうなれば、テレワークという言い方を変える必要がある。

(リーダー)

- ・アドバイザー会議の分科会に「テレワーク」が出来た事に感謝したい。
- ・色々なテーマの中でこれからは働くという事が大変重要でICTを使った働き方の究極がテレワークだと考えるとテレワークは色々な社会問題を解決するポイントだと考え地域活性化もその一つである。
- ・今日のテレワークの提言としては、地域は人と人とのコミュニティ、つながりが重要であるその視点でまとめたい。

(構成員)

- ・ICTの基盤ができて、企業では既に活用している。ただ、地域、コミュニティからみると、絆の希薄化があるので、これを強化すれば地域での仕事が色々な形で増えて来たり活性化できて来たりする。その後に働き方として地域で働くという事がテレワークを使って可能となる。

以 上